

隱亡堀

国枝史郎

青空文庫

「伊右衛門さん、久しぶりで」

こう云つたのは直助であつた。

今の商売は鰻搔であつた。

昔の商売は薬売であつた。

一名直助権兵衛とも呼ばれた。

「うん、暫く逢わなかつたな」

こう云つたのは伊右衛門であつた。

昔は塩谷家の家来であつた。

今は無禄の浪人であつた。

「考えて見りやお前さんは、私に執つちやあ敵だね」

一向敵でも無さそうに、にやにや笑い乍ら直助は言つた。

「洒落かい、それとも無駄なのか」伊右衛門には興味も無さそうであつた。「洒落にしち

「やあ恐ろしい不味い。無駄にしちやあ……いかにも無駄だ」

「でもね伊右衛門さん、そうじゃあ無いか。私の女房の姉というのは、四谷左門の娘お岩、その左門とお岩とを、お前さんは文字通り殺したんだからね」

「そうとも文字通り殺したよ。お岩を呉れると云った所、左門奴頑固に断わったからな。それで簡単に叩つ切ったのさ」

「でも何うしてお岩さん迄？」

「うん、増花が出来たからよ」

「伊藤喜兵衛のお嬢さんが、惚れていたとは聞いていたが」

「お梅と云つて別嬪だった」

「お岩さんより可かつたんだね？」

「第一若くて初心だったよ。子を産みそうな女ではなかった。玩具のような女だったよ」

「へへえ、そこへ打ち込んだんだね！」

「何しろお岩は古女房、そこへ持つて来て子を産みやあがった。どうもね、女は子を産んじやあ不可ねえ。ひどく寡れてみつもなくなる。肋骨などがギロギロする。尤も金持の家庭なら、一人ぐらいは可いだらう。産後の肥立が成功すると、体の膏がすっかり脱

けて、却つて別嬪になるそうだからな。ところが不幸にもあの時分、俺等おいちはヤケに貧乏だつたものさ」

「でも、殺さずとも可よかつたらうに」

「ナーニ、手にかけて殺したんじやあねえ。変な具合で自殺したんだ。尤も自分で死ななかつたら、屹度きつと俺は殺したろうよ」

「恨うらみ死じに死んだんだね」

「お説の通りだ、恨死に死んだ」

「で、只今はお梅さんと、仲宜よくおくらしでござんすかえ？」

直助は古風に冷ひやかすように訊いた。

「何さ、お梅も喜兵衛め奴も、婚礼の晩に叩たたつ切しまつて了しまつた」

伊右衛門は斯こう云うと苦笑した。

「お梅は何どうでも可よかつたが、持参金だけは欲しかつた。伊藤の家庭と来たひにやあ、時々蔵から小判を出して、鏝さびを落とさなけりやあならねえ程、うんとこさ金があつたんだからなあ」

「だが何どうして殺したんで？」

「時の機勢ははずみという奴さ」伊右衛門はひどく冷淡に「お梅の顔がお岩に見え、喜兵衛の顔が小仏こぼとけ小平こへい、其奴そいつの顔に見えたのでな、ヒヨイと刀を引っこ抜くと、コロコロと首が落ちたつてもものさ」

「ははあ、其奴あお岩さんの怨うらみだ」

「世間でもそんなことを云つていたよ」

「でお前さんは何どう思うので？」

「何どう思うとは何を何どう？」

「幽霊が恐くはありませんかね？」

「それより俺は斯こう云い度たいのさ。人間の良心というものは、麻痺させようと思えば麻痺出来るとな」

鳥渡ちよつと直助には解らなかつた。

二人は暫く黙つていた。

此処ここは砂村すなむら隠亡堀であつた。

一 所に土橋がかかつていた。その下に枯蘆かれあしが茂つていた。また一所に樋ひの口があつた。枯れた苔こけが食くつ付ついていた。

前方はドロロンとした堀であった。さあ、確に鰻は居そうだ。

土手の背後うしろに石地藏があった。鼻が半分欠けていた。慈悲円満にも見えなかった。

土手の向うは田圃であった。

稲村が飛び飛びに立っていた。

それは曇天の夕暮であった。

茶がかつた渋い風景であった。

芭蕉ばしやう好み、そんな景色だ。

伊右衛門の前には釣棹つりざおが、三本が所下ろされてあった。

その一本がピクピクと揺れた。

「ああ出来た」

と直助が云った。

で、伊右衛門は上げてみた。

一尾の鯰なますが掛かっていた。

ポンと畚びくへ投げ込んだ。

「ところで何うだい、お前の方は？ お袖そでと仲宜く暮らしているのか？」

伊右衛門は斯う云つて覗き込んだ。

「それがね、洵まことに変へん挺ていなんで」

直助は此処で薄笑いをした。

二

「変挺だつて？ 何どう変なんだ？」

伊右衛門は興味を持つたらしい。

「それ、お前まえさんもご存知の通り、お袖そでの許い婚なずけは佐藤与茂七、其奴そいつを私が叩つ切り、敵かたきの目付かる其うち中、俺等おいらの所へ来るがいと、斯う云つてお袖を連れて来たんでしょ。ところがお袖奴真めまに受けて、許婚の敵の知れる迄は、私に肌身を許さないそうで」

「やれやれ其奴そいつはお氣の毒だ。お前にしては氣が長いな」

「短くしてえんだが成りそうもねえ」

「構うものか、腕力でやるさ」

「其奴そいつだけは何どうも出来そうもねえ」

「そりやあ然うだろ、惚れてるからな」嘲笑うように鼻を鳴らした。「女を占めようと思つたら、決して此方で惚れちやあ不可ねえ」

「お談義かね、面白くもねえ」直助はフイと横を向いた。「惚れねえ前なら其お談義、役に立つかもしれないが、今の私にやあ役立たねえね」

「じゃあ最う一つ手段がある」

「へえ、もう一つ、聞かして下せえ」

「好む所に応ずるのよ」

「あつさりしていて解らねえ」

「いいか、お袖へ斯う云うのさ。敵を目付けた其上に、助太刀ぐらいはしてやるから、俺の云うことを聞くがいいとな」

「成程、大きに可いかも知れねえ」

「逆応用という奴さ」

「今夜あたり遣つ付けるか」

「ところで何うだ、稼業の方は？」

「今年は何うやら鰻奴が、上方の方へでも引つ越したらしい。何処を漁つても獲物がねえ」

「じゃあ随分貧的だろう？」

「顔色を見てくれ、艶つやがあるかね」

「お袖は何うだ？ 顔の艶は？」

「それがさ、俺よりもう一つ悪い」

「つまり栄養不良だな」

「商売物だけは食わせられねえ」

「今夜だけ其せい奴を食わせてやれ」

「え、鰻をかい？ 今夜だけね？」

「そうさ、精力が無かつたら、色気の方だつて起こるめえ」

「うん、こいつあ金言だ」

「それ、金言という奴は、行う所に値打がある」

「よしよし今夜だけ食わせてやろう」

「そうだ、其処だよ、今夜だけだ。明日になったら麦飯をやんな」

「麦飯なら毎日食っている」

「おお然そうか、そいつあ不可いねえ。豆腐のからでも食わせるがいい」伊右衛門は此処で二

やりとした。「一旦手中に入れたからは、女は虐めて虐め抜くに限る。そうすると屹度従いて来る。手が弛むと逃げ出すぞ」

「悪にかけちやあお前が上だ」

「天井抜けの不義非道」

「首が飛んでも動いて見せるか」

「なにさ、良心を麻痺させる、だけよ」

また釣棹が動き出した。

グイと伊右衛門は引き上げた。

「や、南無三、餌を取られた。……それは然うとオイ直助、今日は鰻は取れたのか？」

「うんにゃ」

と直助は首を振った。「店で買つて食わせる気だ」

「そんなに金があるのかえ？」

「金はねえが料がある」懐中から櫛を取り出した。「先刻下ろした鰻搔、齒先に掛かつ

た黒髪から、こんな鱈甲が現われたつてやつさ」

「おや」

と伊右衛門は眼を見張った。「たしか其奴はお岩の櫛！」

「いけねえいけねえ」と懐中へ隠した。「ふてえ分けはご免だよ」
のいと直助は立ち上った。

「それじゃあ旦那、また逢おう」

愉快な空想に耽り乍ら、直助は飛ぶように帰って行つた。

夕暮れがヒタヒタと迫つて来た。

遠景が仄に暈された。

夜と昼との一線が来た。

「どれ棹を上げようかい」

何か樋の口から流れ出た。

菰を冠つた板戸であつた。

「覚えの杉戸」

と伊右衛門は云つた。

手を板戸の角へかけた。グーツと足下へ引き上げた。

バラリと菰を刎退けた。

お岩の死骸が其処にあつた。

肉が大方落ちていた。眉間が割れて血が出ていた。片眼が瘤こぶのように膨れ上がっていた。と、死骸が物を言つた。

「民谷たみやの血筋……伊藤喜兵衛が……根葉を枯らして……この身の恨み……」

伊右衛門は高ノブ尚ルに反問した。

「ははあ、白せりふは夫それだけで？」

お岩の片眼が大きくなつた。

三

「もう是これで三回目だ」

伊右衛門は却つて気の毒そうに言つた。「實際幽霊というような物も、一回目あたりは恐ろしいよ。二回目となると稀薄になる。三回も出られると笑い度たくなる。お岩さん不量見やは止めたがいい。四回も出ると張りたおり付たおずぜ。五回出ようものなら見世物にする。……」
クルリと板戸を翻えした。

一杯に水藻を冠っていた。

「俺には大概見当が付く、水藻を取ると其下に、小平の死骸があるだろう。生前間男の濡れぎぬ衣を着せ、——世間へ見せしめ、二人の死骸、戸板へ打ち付け、水葬札——ふん、そいつにしたんだからなあ。だって小平が宜くねえからよ。主人の病気を癒すは可いが、俺の印籠を盗むは悪い」

ダラダラと水藻を払い落とした。

果たして小平の死骸があった。

死骸はカツと眼を剥いた。

「お主の難病……薬下せえ」

「うんにゃ」

と伊右衛門はかぶりを振った。

「俺は要求を拒否するよ。俺にだって薬は必要だからな」

足を上げて板戸を蹴った。

死骸がバラバラと白骨になった。

「手品としては不味くない。だがね。恐怖を呼ぼうとするには、もう一段の工夫が入る」

突然鬼火が燃え上った。

伊右衛門は刀へ手を掛けた。いやいや抜きはしなかった。

剛悪振りを見せようとして、グイと落差にした迄であった。

「ふんだんに燃やせよ、焼酎火をな」

非常にゆっくりとした足取りで、伊右衛門は町の方へ帰って行った。

後はシーンと静しずかであった。

と、堀から人声がした。

「伊右衛門は度胸が据わったねえ」

それは女の声であった。

「困ったものでございます」

それは男の声であった。

板戸の上下で話しているらしい。

お岩と小平の声らしい。

「さあ、是どから何うしよう」

「ああも悪党が徹底しては、どうすることも出来ません」小平の声は寂しそうであった。

「恐がらないとは不思議だねえ」お岩の声も寂しそうであった。水面に板戸が浮かんでいた。

闇が其上を領していた。

死骸の声は沈黙した。

手近で鶺鴒ぼんの羽音がした。

「こうなつちやあ仕方が無いよ。迎とても無理には嚇おどせないからね」お岩の声は憂鬱ゆううつであった。

「あべこべに私達が嚇おどされます」小平の声も憂鬱ゆううつであった。

「ねえ小平さん」

とお岩の声が云った。「もう崇たたるのは止めようよ」

「止むを得ませんね、止めましょう」

お岩の声が恥しそうに云った。

「妾わたし、そこでご相談があるの。……濡衣ぬいを真実ほんとにしましょうよ」

「え」と云った小平の声には、寧むしろ喜びが溢あふれていた。「あの、それでは、私達二人が」

「そうよ、夫婦になりましょうよ」

「大変結構でございまする」

「これには伊右衛門も驚くだろうね」

「こんな事でもしなかつたら、彼奴は吃驚あいつ びっくりしますまい。……だが最もう私達は伊右衛門のことなど、これからは勘定に入れますまい」

此処で声が一時止んだ。

骨の軋きしむ音がした。

板戸を隔てた二つの死骸がどうやらキッスをしたらしい。

ユラユラと板戸は動き出した。

「嬉しいのよ、小平さん」

「ああ私も、お岩さん」

ユラユラと板戸は流れ出した。

南無幽霊頓なむゆうれいとんしやうぼだい生菩提！

お岩さんとそうして小平さん、

彼等は正まぎしく成仏した。

下流の方へ流れて行った。

鬼火だけが燃えていた。

真暗の夜を青い顔をして、上下左右に躍っていた。

何を一人で働くのだ。

消えろ消えろ！ とぼけた鬼火だ！

幕の閉じたのを知らないのか。

青空文庫情報

底本：「怪奇・伝奇時代小説選集2」春陽文庫、春陽堂書店

1999（平成11）年11月20日第1刷発行

初出：「大衆文藝」

1926（大正15）年6月

入力：阿和泉拓

校正：noriko saito

2007年11月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

隠亡堀

国枝史郎

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>